

ア難民の友人を思い出す。

Atlantic College UNN

A Cには六〇カ国から三五〇人の生徒が集まるといふ。私はその気になって数えたことはないが、この数字を疑うことはない。それでも私が当時もつとも驚き、しかも現在もつともA Cの精神に共感するのは、実は生徒の社会的構成さえもが多様である点である。学校には王家の貴公子がおれば、両親の安否もわからない難民の子どももいた。しかし校内では排他的なグループはanti-socialとして徹底して忌み嫌われ、とにかくみな自然に混じり合った。

A Cおよび他のU W C各校の多様性を可能にするのは奨学金の支えである。もちろん留学生を多数受け入れている学校は世界にいくらかもあるが、これだけ多種多様の生徒集団を擁する学校は他に例が少ないと思う。

U W Cを語る上で今ひとつ重要なのは、



アトランティックカレッジの
Japanese National Evening
にて

そのカリキュラムの充実と生徒たちの学業の実績である。学科的な知識の習得に並行して、生徒たちには常に時代に即した時事問題が問いかけられた。国連事務総長をはじめ著名人が招待講演することも少なからずあった。卒業後に世界の一流大学へ進学する生徒の数だけみても、この学校の高い教育理念を察することができる。

卒業生の進路先もさまざまである。私は医療の道を選んだ。その上で、A Cで同期だった妻の母国ノルウェーを拠点としてA Cの理念を実現させたいと思った。このためにはまず自国を知ることが大切と思ひ(A Cでは自分の無知さをつくづく実感した)東北大学医学部にて六年間学んだ後、東京の国立病院の脳神経外科で二年間研修した。

ノルウェーに移ってからの二年間は発進準備期間として、家庭で幼い娘の育児をしながら独学でノルウェー語を習得し、それから医療ノルウェー語検定試験、ノルウェー医師免許取得など一つ一つ関門をパスした。その後二年間も地方病院にて外科と内科に勤務しながらノルウェーの医療保険制度および地域医療に関する講義と試験を通じ、いわゆる「北欧の福祉制度」に精通した。地域医療に人生の数年をかけてみるという選択もごく自然のものだった。

16の先

トロンヘイムへの転居は後ろ髪を引かれる思いだった。健康状態の芳しくない患者さんたち、一緒にがんばってきた同僚たち、家族ぐるみでつきあった友人たち、それぞれに挨拶をして別れた。世界的な組織リーダーとして活躍する多くのU W C卒業生たちとはまた違ったレベルでの国際交流だった。

今後は脳神経外科という高度先進医療システムのなかで世界の同僚たちと協力する上で、A Cでエッセンスを学んだ国際的センスを試されることになる。この春一週間にわたり脳神経外傷学をテーマにしたスカンジナビアの若手脳神経外科医対象のセミナーに参加した。A Cのような華やかさはないが、こういった国際的な催しはいつでも刺激的である。

私が最初にA Cの校門をくぐった日から近々二〇年になる。当時の楽しかった交遊の思い出に今も自然と元気づけられながら、失敗談などふと思いついて一人赤面してしまふこともある。あのすばらしい青春の二年間を可能にした奨学金スポンサーの富士ゼロックス社ならびにU W C日本協会に深く感謝いたします。

青春の二年間

ノルウェー・トロンヘイム大学付属聖オラフ病院脳神経外科医師

原 聡二郎
はら そうじろう

一九八五〜八七年UWC英国アトランティックカレッジ(AC)、九四年度東北大学医学部卒業。北欧ノルウェーにて九八年より一般外科、内科、プライマリケア医を経て二〇〇三年より現職。



天皇陛下の通訳を務める筆者

現在ノルウェー中部の古都トロンヘイム

の大病院で脳神経外科医として働いている。日本ではこれまであまり知られた町でなかったが、先日天皇皇后両陛下が公式訪問されたため急に知名度が上がったようだ。私も天皇陛下の通訳という形で町のPRに貢献した。

診療所

トロンヘイムへ移る前、私は妻とともに人口二五〇〇人の小さな自治体(こちらでkommuneという)の診療所で医師として働いていた。小さいと言っても面積にしたら東京都の半分ほどの広さがある。family doctorとして一般医療に携わる一方、district medical officerとして自治体の医療福祉政策への監査役、学校および老人施設の医療顧問などを兼ねていた。仕事柄、ほ

●(社)ユナイテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに三九八名の卒業生を輩出している。

とんどの住人たちと何らかの形で接触した。最近ノルウェーの都会では医師の権威がやや落ちてしまったようだが、この町では「ドクトール」としてずいぶん丁寧な扱いを受けた。

在職中に関わった仕事の中で新しい問題として浮き上がってきたのが難民の健康である。ノルウェーにはしばしば難民の波が文字通り世界中から押し寄せてくる。彼らの人種構成はもちろんのこと言語文化的背景などは大変色とりどりである。この上に学歴や職業などの社会的要因が加わり一塊の「難民」というグループが形成される。彼らがノルウェーに来る理由にしても、戦争や政治的なものから貧困までさまざまである。新しい社会環境に適応できないことも多く、自国で受けた虐待や迫害による傷がさらに深まることになる。当然ながら精神的な問題提起が非常に多い。私の働くkommuneにも難民一時受け入れ施設が建造され、当然ノルウェー語を話さない患者の数が増えた。ACで同室だったエチオピア